

Cutaneous manifestations of COVID-19: Report of three cases and a review of literature

背景

- ・ COVID-19 感染の患者では様々な皮膚症状が認められているが、これらの皮膚症状の全体的な類似点については未だにまとめられていない。

目的

- ・ この総説では、3 例の症例報告と文献レビューを通じて、COVID-19 患者における皮膚症状の概要を提供することを目的とする。

方法

- ・ 文献検索には PubMed、OVID、および Google 検索エンジンを使用して、COVID-19 の流行発生から 2020 年 4 月 20 日までに発表され、皮膚症状と COVID-19 に言及している英語で書かれた原著論文と総説論文を検索対象とした。
- ・ 検索ワードには、“COVID-19”、“2019-nCoV”、“SARS-CoV-2”、“coronavirus” と “skin”、“dermatology”、“cutaneous”、“urticaria”、“rash” を組み合わせて使用した。
- ・ 文献から下記のデータを抽出した。
著者、発表年、地域、皮膚症状を呈した患者数、年齢、性別、COVID-19 の診断状況、皮疹の性状とその部位、発症時期と治癒までの期間、関連した症状、COVID-19 感染の重症度と皮膚病変の関連、COVID-19 感染に対する治療

結果：

- ・ 検索した 18 編（6 編は症例集積で、12 編は症例報告）の論文の内容に自験例 3 例を追加して、合計 72 例について解析した。
- ・ COVID-19 の最も一般的な皮膚症状は、紅斑丘疹型の発疹（麻疹様）であり、36.1% (26/72) の患者にみられた。
- ・ その他の皮膚症状は、丘疹水疱性皮疹（34.7%、25/72）、蕁麻疹（9.7%、7/72）、有痛性肢端赤紫色丘疹（15.3%、11/72）、網状皮斑（2.8%、2/72）および点状出血（1.4%、1/72）であった。
- ・ 72 例のうち 67 例で皮膚病変の部位が報告されており、大部分の病変が体幹と手足にみられた。患者の 69.4%（50/72）で体幹に病変がみられ、19.4%（14/72）で手足にみられた。
- ・ 皮膚病変の発症時期は患者間で幅があり、COVID-19 診断の 3 日前から 13 日後であった。COVID-19 の診断時または呼吸器症状の発症時に皮膚病変を呈していた患者は 12.5%（9/72）で、診断後または呼吸器症状発症後に皮膚病変を呈した患者は 69.4%（50/72）であった。18.1%（13/72）の患者では皮膚病変の発症時期が報告されていなか

った。呼吸器症状の発症後または COVID-19 診断後に病変を発症した 49 人の患者のうち、74.0% (37/50) は 7 日以内に皮膚病変が出現し、6.0% (3/50) は 7 日以降に出現した。

- ・ 治療経過が報告されている 50 症例では、全患者の皮膚病変は治癒しており、治癒期間は最大で 10 日であった。48.0% は 7 日以内に治癒し (24/50)、50.0% は 7 日以降に治癒した (25/50)。1 例 (2.0%) は治癒期間が不明であった。
- ・ 5 編の論文の合計 23 人の患者において COVID-19 感染の重症度と皮膚病変の重症度との関連について報告があった。21 人の患者 (91.3%) では、皮膚病変の重症度は COVID-19 の重症度とは関連性が低いか、相関はみられなかった。反対に 2 つの個別の報告では、2 人の患者 (8.7%) で COVID-19 と皮膚病変の重症度が関連するとされた。
- ・ ほとんどの研究では、組織学的所見は報告されていない。

結論

- ・ COVID-19 感染は様々な臨床像の皮膚症状を引き起こす可能性があり、皮膚症状が COVID-19 感染の時宜を得た診断に役立つかもしれない。

症例 1

71 歳の白人女性。10 日前からの発熱、湿性咳嗽、息切れの悪化を訴えてミラノの救急科を受診した。既往歴や併存症、内服薬は無く、アレルギー歴もなかった。患者は夫とミラノに住んでおり、夫は COVID-19 感染と診断されていた。血液検査では、白血球数と血小板数は正常値 (WBC 6470/mm³、PLT 290.000/mm³)、肝腎機能も正常で、CRP の上昇 (49.4 mg/L) がみられた。血液培養は陰性だった。胸部 X 線で両側性間質性肺が認められた。鼻咽頭ぬぐい液での SARS-CoV-2 RNA 検出検査が陽性であった。患者は感染症部門に入院し、ロピナビル/リトナビルとヒドロキシクロロキンによる適応外の抗ウイルス療法と、イタリア感染症および熱帯病学会 (SIMIT) のガイドラインに沿った第 3 世代セファロスポリン (セフトリアキソン) による経験的抗菌薬療法を開始された。入院中に投与された他の薬物は、ラベプラゾール、パラセタモール、メトクロプラミド、ジヒドロコデイン、ラクツロース、低分子量ヘパリンの皮下注であった。数日後には彼女はすぐに回復した。すなわち、発熱は無くなり、酸素量を漸減可能で、3 月 30 日には、抗ウイルス療法と抗菌療法は中止された。その後数日にわたって、Grover 病に似た痒みを伴う紅斑丘疹型の皮疹が体幹に出現した (図 1)。

症例 2

77 歳の白人女性。頸部リンパ節腫大、発熱、咳、体幹のびまん性紅斑丘疹型発疹 (麻疹様) のためミラノの病院に入院した (図 2a)。入院の 1 日後に下腿に出血斑性発疹が出現した (図 2b)。鼻咽頭ぬぐい液での SARS-CoV-2 RNA 検出検査が陽性であった。胸部 X 線で肺炎像はみられなかった。治療は、ロピナビル/リトナビルとヒドロキシクロロキンを使用した抗ウイルス療法と低分子量ヘパリンの皮下注が行われた。皮膚病変は徐々に改善した。

症例 3

72 歳の元来健康な白人女性。頭痛、関節痛、筋肉痛、発熱によりミラノの救急科に来院した。4 日後、痒みを伴う丘疹小水疱性皮疹が乳房下、体幹、臀部に出現した (図 3)。血液検査では、白血球数、CRP、ESR の軽度上昇がみられた。鼻咽頭ぬぐい液の検査で COVID-19 が陽性。胸部 X 線で肺炎は認められなかった。臨床像が出現してから約 10 日後には、全身症状、皮膚症状ともに完全寛解がみられた。